

～ セピア色の風景 ～

「お盆」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事



仏壇の前の小机には、お盆に間に合うようマコモを刈り取り、干し、編まれた盆ごぎが敷かれた。その上には、ナス、キュウリ、トマトなど夏野菜や、昆布、ホウズキ、団子などが置かれた。そして、樹の種類は忘れたが決まった樹で、小枝の皮をむいて作られた箸が二膳。

お盆最終日には、供えものが盆ごぎに包まれ昆布で縛られ川に流すのだが、その盆ごぎを背負うように、下には馬になったキュウリあるいはナスがくり付けられた。そのとき馬の四本の脚になったのが、二膳の箸であった。

庭先では、ご先祖さんが迷わず実家に帰れるように、松の薪で迎え火を焚いた。それは、一年に一回だけの帰省のためか、あるいは周りの風景も年々変わるためか、はたまたあの世に行ってもご先祖さんも年々年を取るためか、よく分からない。

さらに目印にと、長い竹を立て上の方に十字状に横竹を渡し、頂点と横竹の端は縄でつなぎ三角形にして、横竹の端にはスギの葉を飾った。横竹には小さな滑車を取り付け、下から小さな小屋状の灯籠（確か「アゲンドウロウ」と呼んでいた）をつり上げた。灯籠のろうそくの火は、その下で焚く迎え火をつないだ。お出でになったご先祖さんは、遠慮深いのか玄関からは入らないで、縁側から直接座敷に入るそうで、縁側には白い大きな提灯が下げられた。お盆の小遣いなどという習

慣はわが家にはなかったが、このような準備やにぎやかになった仏壇に加えて、帰省する親戚と再会できる期待のせいか、子どもいや家の者全てがウキウキしたものがあつたように記憶している。

そのウキウキに輪をかけるのが、遠くに聞こえる神社からの祭り囃子であつた。境内のその夜は、まさにお盆に行われる「盆踊り」であつた。その昔の昔の田舎では年に一度、門限無しで若い男女が出会い、遊ぶことができる夜と場所であつたと聞く。

毎年必ずやってくるからか、お盆の風景は、まぶしい光とうるさいほどの蝉時雨とともに、色あせず思い出される。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める